

# 別府市長賞

## 誰も生きやすい世の中へ

べつふしりつほくぶちゅうがっこうさんねん  
別府市立北部中学校三年 安森 やすもり 咲恵 さえ

わたしにはAちゃんという友達がいる。Aちゃんは生まれつき複数の障がいがある。とてもからだ小さく、指が二・三本ずつしかない。そして知的障がいがある。そのためAちゃんと話すことはできなかったがAちゃんは私を見つけると笑ってくれた。私はそんなAちゃんが大好きだ。

ある日、Aちゃんのお母さんとAちゃんと公園で遊んでいると、車イスにのっていたAちゃんの前を男の子とそのお母さんが通った。すると男の子は指を差しながら

「あの子変なのー。指も少ないし、気持ちわるいー。」

と言いつ、その男の子のお母さんも

「あんまり見ちゃだめよ！、いつ暴れだすか分かんないんだから。」

と言いつ。私はそれを聞いたとき頭が真っ白になった。そして涙がでてきた。すぐにAちゃんのもとに走ってかけよつた。泣いてる私をなぐさめながら、Aちゃんのお母さんはAちゃんに

「ごめんね。きちんとした体に産んであげられなくて。」

と謝つていた。それを聞いて私は悔しかった。ただ公園にいただけのAちゃんがなんでそんな心無い言葉を浴びせられなくてはいけないのか。こんなにも優しくAちゃん想いのお母さんが謝らなければならぬのか。泣き続ける私を見て悲しそうな顔をしたAちゃんの顔が私は今でも忘れられない。

またつい先日せんじつのことだ。電車でんしゃにのっていると車イスくるまの男性だんせいがのってきた。少し電車でんしゃは混  
んでいたので車イスくるまの分ぶん、少し詰つめなければならなかった。すると一人ひとりの男性だんせいが

「場所取ばしよとって邪魔じゃまなんだよ。」

と言いった。すると、車イスくるまの男性だんせいは驚おどろいた顔かおをしてあるときAちゃんえーが浮かうかべた悲かなししそう  
な顔かおになった。そして次つぎの駅えきで降りていった。Aちゃんえーのときのように車イスくるまの男性だんせいは電車  
にのっていただけだった。なぜ私わたしたちとなにも変かわりない生活せいかつを送おくっているだけの人が傷きずつ  
かないといけなのだろう。私わたしたちとAちゃんえーや車イスくるまの男性だんせいとは何が違ちがうのだろうか。  
Aちゃんえーは言葉ことばを上手うまく話はなすことが苦手にがてだ。私わたしは絵えを描かくことが苦手にがてだ。車イスくるまの男性だんせいは  
歩くことが苦手にがてだ。私わたしはダンスが苦手にがてだ。これらに違ちがいがあるのだろうか。全てすべが完璧かんぺきな人間  
なんていない。違ちがいがあるからこそその人間にんげんだ。その違ちがいを補おぎない合あえるのが人間にんげんだ。人間にんげんは  
一人ひとりで生きていくことなんてできない。だからお互たがいの違ちがいを認め合あい助け合あうことが大切たいせつ  
なのだ。

Aちゃんえーや車イスくるまの男性だんせいに心無こころない言葉ことばを浴あびせた人ひとたちは目めに見みえた明確めいかくな自分じぶんたちと  
の違ちがいを受け入れることができなかつたのだと思う。ただ知しっていてほしい。相手あいても同じ人間にんげん  
だということ、その人ひとを大切たいせつに思う人ひとがいるということ。  
言葉ことばは大きな力ちからを持つ。それは使つかい方かたによっては凶器きょうぎとなる。しかし使つかい方かた次第しだいでは、  
一言ひとことで人ひとを笑顔えがおにする力ちからを持つ。言葉ことばの力ちからを知り自分じぶんの発言はつげんに責任せきにんを持つてほしい。言葉ことば  
は取り消けせない。取り消けせないのなら優しく温あたたかい言葉ことばを使つかってほしい。それが誰だれもが生き  
やすい明あかるく美うつくしい未来みらいへの一歩いっぽだと私わたしは思う。